

## 今月のみことば 2016年6月

「私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。」

(コリント人への手紙第一8章4節)

# 山頂に住む人喰い鬼の話

昔、あるところに好奇心旺盛で旅が大好きな青年がいた。いろいろな所へ出かけては知識を吸収し、経験した出来事を記録していた。

ある時のこと、彼は山のふもとにある、美しい緑に囲まれた村に来たが、驚いたことに村人は皆、死人のように元気がなかった。

わけを聞いてみると、山頂に恐るべき人喰い鬼がいて、夜になるとみなが怖気(おそけ)立つような唸(うな)り声を発するので、いつ自分が殺されるか、と気が気でなく恐怖の毎日を過ごしているのだ、という。

青年は村人の反対を押し切って、その人喰い鬼と話を付けて来ようと山頂へと登っていった。確かにそこには鬼がいたが、驚いたのは、近づけば近づくほど、鬼はどんどん小さくなり、青年が手を差し出すと、手のひらに飛び乗ってきたことであった。

「君は何者なんだ」と青年が聞くと、「俺の名は『恐怖』さ」と答える。「どういう〈恐怖〉なんだい」と聞くと、「それは人によりけりだ。〈病気〉を怖がる人間もいれば、〈貧乏〉を恐れる人間もいる。権威が怖い人間は、俺を〈権威〉だと思って見るのさ。〈不正〉〈野獣〉〈嵐〉〈鉄砲水〉〈戦さ〉の権化として俺を見る人間もいる」。

「君はこんなにちっぽけなのに、どうして人々は君を巨大だと思っているのだろう」

「恐怖が大きければ大きいほど俺は大きく見えるんだ。俺のところに来て、俺をしっかり見てみなければいつまでも俺の本当の大きさはわからないのさ」。



以上は、決死の覚悟でイスラム教の世界から離れた女医ワファ・スルタン博士が、著書『人を憎む神(A GOD WHO HATES)』の冒頭で紹介している話である。

我々日本人は、別なものが恐怖の対象となっている。〈回りはどう思うか〉〈人と違うことをするのが怖い〉など、〈神様〉ではなく、〈人様〉を恐れる傾向が強いのではないだろうか。

しかし、本当の神以外、いかなる〈人〉も〈偶像〉も恐れる必要はない。よく見てみれば〈人〉は神に比べて実に小さな存在であるどころか、偶像に至っては、存在さえしないからだ。

